

真木大堂

（所蔵庫内）

馬城山伝乗寺（まきさんでんじょうじ）の所蔵庫に展示されているこの木造の仏像の数々は、日本屈指の素晴らしい木像だとされています。これらはすべて国の重要文化財に指定されており、11 世紀か 12 世紀に彫られたと考えられていますが、制作場所や制作年の正確な記録はありません。

中央にある座った姿をした像が、阿弥陀如来像です。安らかで瞑想的な姿勢が、武装した 4 体の守護神に守られています。この如来像は、檜（ひのき）の大きな木材を何本か使って彫られたものです。かつては如来のむき出しの肌を覆っていた金箔が今では剥がれ落ち、黒の漆塗りの下地を見せていることにご注目ください。近くでよくご覧になると、守護神の足元に 4 体の鬼が様々なポーズで捕らえられているのが見えると思います。

阿弥陀仏の両側には、密教の五大明王のうちの 2 名の明王がいます。右側には、人々が安全と健康をお祈りする守護神である不動明王の珍しい立像が立っています。不動明王の木像としては日本最大のもので、左眼が濁って地を見下ろしているのに対し、澄み切った右眼は回りをしっかり見張っているのにご注目ください。背後に背負う迦楼羅焰（かるらえん）は、後で付け加えられたものだと考えられ、おそらく江戸時代（1603～1867）のものではないかとされています。

左側では、大威徳明王が水牛にまたがっています。忿怒相をした明王の激しく睨む姿は、死に対する勝利を表しています。これでこの明王が時として戦士の神と呼ばれるわけが理解できますね。この神はさまざまな形で描写されます。九面、三十四臂、十六足のもものありますが、日本では六面六臂六足が最も一般的です。地元の伝説では、明王がまたがっている動物は富貴寺の伝説に登場する牛だともされていますが、同じ描写が中国やチベットなど他の地域でも見られることから、富貴寺伝説との繋がりは疑わしいとされています。

伝乗寺

現在は真木大堂と呼ばれるこのお寺は、1603年から1868年まで続いた江戸時代に建てられたものですが、実は謎が絡んだお寺なのです。お寺の入り口にはこの半島全体の本山本寺とされていた寺院の名前である「伝乗寺」という文字が書かれていますが、これは今では存在せず、それが以前どこに置かれていたかも分かっていません。それでこのお寺は「幻の寺院」と呼ばれているのです。しかし、隣の所蔵庫に祀られている仏像は、かつては伝乗寺に所蔵されていたと信じられています。

本堂の先には、古代の石碑や仏像が集められた、散策用の公園があります。笠塔婆と呼ばれる石造の仏舎利塔を探してみてください。石塔の頭部分が修行中の僧がかぶる編み笠を思わせるように作られたとされています。五輪塔にもご注目ください。記念碑として使われる小型の仏塔です。五段に積み重ねられた石は、地水火風空を（昇順に）象徴させています。またここでは国東塔と呼ばれる仏塔もご覧いただけます。経典を納めるための穴が石に彫り込まれた、この地域独特の石塔です。